

千葉泉弘著「世界寺子屋運動、識字活動から国際理解」論点、読売新聞 2010年5月22日朝刊を読む

世界寺子屋運動、識字活動から国際理解

1. 文字が読めない、書けない人をなくすための世界寺子屋運動を、日本ユネスコ協会連盟が開始したのは、国際識字年の前年の 1989 年だった。以来、多くの方々からの募金や書き損じはがきの提供などで作った資金で、アジアやアフリカを中心とした 43 개국 1 地域で 442 のプロジェクトに取り組み、124 万人の非識字者に基礎教育の機会を提供してきた。この 20 年間に日本が世界に誇る運動に成長した手応えを感じている。
2. 運動は、「学びの場 = 寺子屋」を建設するだけでなく、その自主的運営を支援し、教える人を育て、文字を手にした人たちの職業訓練にも取り組むなど、地域の人たちのニーズを踏まえた支援へと発展してきている。しかも、先進国から途上国に対する単なる援助の枠組みを超えて、ユネスコ憲章の前文にある「平和の^{とりで}砦」を目指す輪を広げ、共に生きる喜びを分かち合う共生社会の実現を目指す活動へと進化しつつある。
3. 例えば、識字活動に関心を持つ日本の若者が現地を訪れる取り組みは、1991 年から始まった。自分たちの暮らしからは想像もできない厳しい環境で真剣に学ぼうとする現地の子供たちの姿を見て、日本の若者たちも真剣に考え、元気ももらって帰国する。そして、彼らが持ち帰った現地情報は、国際理解教育の生きた教材として国内各地で活用されている。
4. 現地の関係者を招く取り組みも 90 年にスタートした。各地の識字活動が、現地当事者の口から語られることにより、文字を学ぶことを通じて貧困から何とか脱却しようとする熱い思いが、日本各地に伝わり始めている。
5. 一連の努力により、世界寺子屋運動は、識字率の向上にとどまらず、国境を超えた相互理解を深める契機となることも期待されている。さらに、その相互理解を通じて、紛争防止や紛争終結後の平和構築、資源の有効利用、地球温暖化等の問題解決への貢献が求められ始めている。
6. こうした新しいテーマとどう向き合うかが、世界寺子屋運動の今後の課題でもある。そして、この課題の解決には、今後、インターネットや太陽光発電などの先端技術の導入が、飲料水や食品の支援とともに鍵を握っている。
7. 江戸時代の庶民の学びを支えた寺子屋が日本の学習社会の基礎を築き、日本の発展に寄与したように、世界寺子屋運動が、識字と基礎教育を通じて自信を持って力強く生きる人を育て、その国の開発の基礎を築くと確信する。
8. この運動は、読売新聞社と日本ユネスコ協会連盟が共催した「すべての人々に文字を」をいう識

字キャンペーンで幕を開けた。そして、「読み書きが出来ない人に役立てて欲しい」という故マイケル・ジャクソン氏らの寄付がきっかけになり、多くの一般市民の力が支えてきた。提供いただいた書き損じの 50 円はがきは、郵便局の窓口で 45 円分の切手に換わり、それを企業に買い取ってもらうことで支援資金が生まれる。その 1 枚分でアフガニスタンでは、チョークが 50 本、鉛筆なら 5 本買えるのだ。

9．多くの途上国政府や援助機関の識字問題に対する関心はまだ低く、寺子屋運動も資金面の困難に直面している。世界にはまだ 7 億以上の非識字者がいて、その多くが女性である。運動は 20 周年を迎えた。改めて協力をお願いしたい。

[コメント]

世界のために自分は何ができるか。何もできないのではと思う人が多いと思うが、実は、50 円の書き損じはがき 1 枚でアフガンならチョーク 50 本、えんぴつ 5 本が買え人々の識字率向上に役立つという。ユネスコの世界寺子屋運動の基本的な考えをわかりやすく説明して下さった千葉先生のコラム。できるところから少しずつでも取り組みたい。

- 2010 年 5 月 23 日 林明夫記 -